

総力戦の軍事戦略 ーアメリカの視点ー

ジェフリー・ワウロウ

ラッセル・ウェイグリー (Russell Weigley) の 1973 年の著書『アメリカ流の戦争方法』(*The American Way of War*) は、南北戦争以来、アメリカが敵を殲滅もしくは消耗させて勝つための経済面および軍事面での圧倒的な優位を実現するために工業生産と技術力を用いたと断言している。それはいかなる交渉や妥協の可能性もない、敵の完全な打倒をも目的としている。

ウェイグリーはベトナム戦争時に同書を著したが、当時のアメリカ流の戦争方法の将来の有効性については、イラクやアフガニスタンでの二度の経験を経た今日の我々と同様に悲観的であった。

しかし、1941 年から 45 年までの日本に対しては、アメリカのこの自己不信が入り込むことは全くなかった。そこで我々は、活力、暴力、そして、驚くべきほどの技術革新によって計画されたアメリカ流の戦争方法を目の当たりにした。いかなる大国も第二次世界大戦の太平洋戦域での戦いほど広大かつ複雑な大洋戦を戦ったことはかつてなく、そこでのアメリカの完勝は、幾多の困難にもかかわらず、当時の注目に値したものであり、今日振り返っても、依然として驚くべきことである。

ヨーロッパおよび太平洋におけるアメリカの軍事行動を可能にした「生産の奇跡」は広く論じられているので、ここではそれを要約するだけにしたい。アメリカの工業生産高が戦時のピークに達した 1939 年から 44 年までの間、アメリカの GDP は 55 パーセント上昇し、軍事費は GDP 比で 39 年の 1.4 パーセントから 44 年には 45 パーセントにまで上昇した。自動車およびその他の近代文明の利器といった民間部門は、兵器を製造するために、戦争の間、一時停止状態となったにもかかわらず、戦争中、経済の窮乏を耐えて忍んでいた日本とは対照的に、アメリカの生活水準は意外にも向上した。

合計で、アメリカは第二次世界大戦に 2880 億ドルを支出した。それは今日の貨幣価値に換算すると 3 兆 6000 億ドルになる。インフレを調整した上で見ると、それはニューディール政策の経費の 8 倍、朝鮮戦争の経費の 9 倍、ベトナム戦争の経費の 5 倍である。第二次世界大戦の間、アメリカは日本の 11 倍の石炭、222 倍の石油を産出し、13 倍の鋼鉄、40 倍の砲弾を生産した。

戦争の最初の年、主力艦の損失は、アメリカは 40 パーセント、日本は 30 パーセントであった。アメリカはその損失を迅速に補い、さらに拡充したが、日本は戦争の全期間にわたって、戦争初期の損失を補うことさえできなかった。1940 年のアメリカ海軍の予

算だけで、それ以前の日本海軍の建艦費用の10年分を凌駕した。1943年に日本のドックで建造中の空母はわずか3隻であったが、アメリカでは22隻が建造されていた。日本の航空機生産はアメリカの20パーセントに過ぎなかった。1942年には、アメリカは4万9000機の飛行機を作ったが、日本は9000機のみであった。戦争の全期間に、アメリカは32万5000機の戦闘機を製造したが、日本は7万6000機にとどまった。

早くも1943年には、太平洋での戦争にアメリカはその資源のわずか15パーセントを費やすだけで、後に見るように、アメリカは対日戦の形勢を一変させることができた。その統計上の数値だけで両国の間の経済力の格差が示された。この文脈で、戦前の日本海軍が「条約派」と「艦隊派」に分裂していたことを思い出してみると良い。「艦隊派」は1920年代と30年代の五大海軍国によるワシントン海軍軍縮条約およびロンドン海軍軍縮条約に反して、艦艇保有制限を超過することを主張した。「条約派」は日本に認められた60パーセントの比率を遵守することを主張した。まさに、それが日本のような相対的に弱い国が、アメリカに対していかなる競争力をも維持する最善かつ唯一の道であり、アメリカが一度でもその圧倒的な工業力の優位を利用して海軍の大規模な拡張に着手したら、日本を容易に破綻させるであろうからであった。

それにもかかわらず、経済的、物質的優越では結果は確定できず、困難な戦いによって確定した。山本五十六は、「アメリカ海軍およびアメリカ国民が士気を回復し難いほどの痛撃を加える」と言って真珠湾攻撃を強く主張、日本は戦場で勝つ必要はない、「彼の国の政治家は犠牲を払う自発性を（欠いており、）（中略）ワシントンのホワイトハウス自体の降伏」によって日本は勝利すると論じた。日本はアメリカに打ち勝つことは決してないと想定しながら同時に、日本は1905年にロシアが苦境を経験したのと同じように、アメリカはヨーロッパでの戦闘と太平洋を横断する長距離の進軍によって疲弊し、従って決して日本を征服し得ず、むしろ妥協するだけであると決めてかかった。第二次世界大戦における枢軸国の多くの戦略上の誤算の中でも、これは最悪の誤算であった。

アメリカの対日戦は距離と補給、そして、主要な戦場である太平洋の特殊性というアメリカ側の困難な事情が、ドイツとの戦争を含む他のいかなる戦争とも比較にならなかったという意味で、史上、最も稀有な戦争の一つとして際立っている。

振り返ってみると、あの戦争で日本に勝ち目はほとんどなかったと我々はしばしば思うが、そう考えてしまうと、最初に日本が享受していた、かなり有利な立場を無視することになる。日本が意図したような日本の脅しに直面しても、全く止まることがなかったアメリカ流の戦争方法とアメリカの民主主義だけが、日本の有利な立場を圧倒できたと言うのが正しい。

アメリカの太平洋における唯一の大規模な基地である真珠湾は、マニラ湾のアメリカの小さな海軍基地カビテから数千マイルに位置しており、その間には何もなかった。ミ

ッドウェイ島、ウェーク島およびグアム島には語れるほどの設備は全くなく、日本に制圧された時にはやはり最後まで無防備であった。(真珠湾への奇襲を免れた3隻のアメリカ空母のうちの2隻は、ミッドウェイ島とウェーク島の防衛用の飛行機を搬送していたためハワイに停泊していなかった。3隻目はサンディエゴにいた。)

初めのうちは、日本はその強い立場と欧米の弱点を最大限に利用した。

近海の中心のおよび二次的な日本の基地は空襲に対して難攻不落であった。さらには、日本はその国際連盟委任統治領において国際的な禁止規定を無視し、マリアナ群島、マーシャル群島およびカロリン群島に一連の海軍と航空隊の基地を築いた。トラック諸島はオーストラリアへ向かうルート上にあり、フィリピンやラバウルに至るアメリカの主要補給路をさえぎるところに位置していた。

1937年に中国への侵攻を開始して以降、日本は台湾を含む中国の全ての港を手に入れ、次にフィリピンを包囲した。1941年後半、日本はフランス領インドシナを侵食し、シンガポールからちょうど750マイルのところにある第一級の停泊地、カムラン湾の使用を確保した。

さらに日本は、真珠湾に一撃を加え、フィリピン、タイ、そして、石油資源に恵まれたボルネオ島、スマトラ島、ジャワ島へと攻撃を続け、香港は攻撃を受けて孤立した。マラヤへの上陸作戦に成功すると、サイゴンを離陸した日本海軍の基地航空隊が戦艦「プリンス・オブ・ウェールズ」と巡洋戦艦「レパルス」を撃沈した。その勝利は、損傷を受けたアメリカ戦艦8隻が停泊中、乗組員が最小限であったところに不意打ちをくらって驚いた真珠湾攻撃と同様に衝撃的であった。2隻のイギリス艦は人員を配置につけて航行中であったが、やはり日本の飛行機に撃沈された。タイは12月9日に屈し、香港はクリスマスの日に陥落、マニラは1942年1月2日に開城した。イギリス領マラヤの巨大要塞シンガポールは2月15日に、その3日後、バリ島が陥落した。

1942年4月までの日本の緒戦の躍進、すなわち中国から中部太平洋、アラスカからオーストラリアまで伸びた1万平方マイルの資源基盤と帝国は、工業化されたアメリカ流の戦争方法という力強い不屈の努力がなければ、「無敵」であったかもしれない。日本は1930年代に、高速、長距離、双発、陸上基地発進の爆撃機——ネルおよびベティー——を開発していた。それらはまさしく中部および南太平洋の島々に配備されて、アメリカ海軍が日本に向けて進軍してきた際、それを切り崩すために(急降下爆撃機「ヴァール」と雷撃機「ケイト」とともに潜水艦と連携して)使用可能であった。

この戦争が始まるまで、概して我々は基地を、産業資源を諸部隊に送る補給線上の固定施設と考えていた。大洋の広がり、想像を絶する補給の労力を伴うこの戦争において、1隻の空母、3隻の巡洋艦および6隻の駆逐艦からなる任務部隊が1日6000バレルの石油を消費し、航空作戦が実施されれば、さらに多くの石油を消費した。新しいシス

テムを考案する必要があった。補給線が常に満たされていない限り、最前線では何も保障され得ず、あるいは本国で十分迅速に積載することもあり得なかった。従って、この戦争では、固定基地は軍事作戦においての行動の選択をもたらす「作戦基地」によって補われた。前方へ絶えず補給することができたので、作戦部隊で物資が枯渇することは全くなかった。

日本はアメリカが大西洋での海戦や、ソ連が崩壊寸前と思われたヨーロッパでの劣勢に釘付けにされると考えていた。確かに、1940年11月に練られ、1941年11月に「レインボー5」として正式に承認されたアメリカの「プラン・ドッグ」では、少なくとも1年間は太平洋戦域を装備不足で守勢のままにしておく「ドイツ第一主義」の戦略が要求されていた。

それにもかかわらず、1942年以降、アメリカは太平洋で立ち直り始めた。日本は連合国の反攻を跳ね返すために、連合国が発進基地として使用する可能性がある陣地をすべて確保すれば十分であると考えた。

真珠湾攻撃の2週間後に、56歳のチェスター・ニミッツ提督を太平洋艦隊司令長官に任命したのは、アメリカの反攻を促進する上でおそらく決定的であった。古今を通じて最も偉大な海軍指揮官の一人であるニミッツは、真珠湾での損失に平然と対処し、単に防御するだけではなく、1942年1月に彼が掌握していた264機の航空機を搭載する3隻の空母、わずかながらの巡洋艦と駆逐艦、真珠湾攻撃に耐えた戦艦1隻、および、磁気近接起爆装置の不具合で魚雷が機能しなかった潜水艦隊を用いて「攻撃」することを決心した。ニミッツは新造の空母とその他の軍艦の第一陣が太平洋に到着し始めるまで、少なくとも1年間、待つ必要があることを承知していた。

艦隊を集中するというマハンの原則を海軍航空の黎明期に適用することで、本質的に日本の手段となっていた機動部隊として知られる日本の戦力に鑑みれば、ニミッツの好戦的な性格は一層顕著であった。アメリカが空母を独立した任務部隊の基幹として単独で使ったのに対して、山本と彼の提督たちは一か八かの賭けに出た。真珠湾を攻撃し、それからミッドウェイに必勝の突撃を試みようとした戦力は、12隻の巡洋艦と駆逐艦に守られた6隻の大型空母および2隻の高速戦艦で構成されていた。それが意味していたのは、アメリカの任務部隊の管制能力が60機から90機までであるのに対して、日本は一度に412機の飛行機を飛ばすことができるということであった。日本は真珠湾攻撃の際、350機を飛ばしていた。

ニミッツは防御上の掃討のため、そして、補給と増援の部隊を援護するために、空母と巡洋艦で任務部隊を編成した。彼は直ちに潜水艦による攻勢作戦を開始した。彼は中部太平洋で日本がもたらす好機をいかなるものであっても逃さず攻撃して、日本から主導権を奪うことを目指した。海軍作戦部長アーネスト・キング提督（およびルーズベル

ト大統領)は、ラバウルの日本軍基地の攻略と、オーストラリアおよびニュージーランドとの後方連絡線を維持するために、南西太平洋に大規模な戦力を派遣するよう迫ったのに対して、ニミッツは中部太平洋で彼の限られた戦力をより攻撃的に使用することを繰り返し訴えた。

それでも、兵站上の計り知れない困難は解決されないままであった。修繕基地は遠く、前進基地は緒についたばかりであった。

真珠湾攻撃の衝撃の後のニミッツの予想外の大胆さは、日本を防勢に押し戻し、1941年末に公表された日本の攻勢戦略を防勢的なものに転換させた。当初、日本はオーストラリアとインドまでもを占領することを検討していたが、1942年1月にマーシャル群島およびギルバート諸島、2月にラバウル、3月にウェーク島およびニューギニアを攻撃したニミッツの空母任務部隊により後退を余儀なくされた。

ニミッツは海軍航空と大洋戦の新たな可能性を探究していた。1942年5月の珊瑚海海戦は、艦砲射撃を交えることなく、空母艦載機によって勝負を決した史上初の海戦であった。戦闘のリスクは驚くべきものであった。珊瑚海はオアフ島から3500マイル、そして最も近い燃料油の供給源から600マイルで、アメリカの空母は給油艦に完全に依存する状況に置かれた。日本にとって戦術的勝利であった珊瑚海海戦は、日本が戦闘で失った飛行機(105機)、戦闘で失った経験豊かなパイロット、小型空母1隻を補充できなかったのに対して、アメリカが「レキシントン」の損失を容易に補うことができたという点で、アメリカにとっては「戦略上」の勝利であった。

1942年6月のミッドウェイ海戦は、トラファルガー海戦や日本海海戦に匹敵する規模の、太平洋での戦争における決定的勝利であった。真珠湾攻撃を免れた3隻のアメリカ空母を戦いに誘い込もうとして、日本は徹底的に打ち負かされた。空母1隻、駆逐艦1隻、航空機150機および将兵310人を失いながら、アメリカ海軍は日本の空母4隻、重巡洋艦1隻、飛行機275機および日本の最も経験豊かな無線通信士の一部を含む将兵4000人を駆逐した。

暗号解読と、ニミッツの迅速で明敏な対抗手段、そして、ワシントンからのプレッシャーに対抗する意思によって促進されたミッドウェイ海戦で、主導権を日本から完全に奪った。山本はこの海戦に先立ち、アメリカが1943年には全て就役する11隻の大型空母を建造中であることを承知していた。(日本が建造中であった空母は1隻のみで、しかも、その就役は1944年の予定であった。)ミッドウェイ海戦後、日本はもはや制海権を失い、再び握ることはなかった。さらに、日本の艦隊は依然として強力であったが、致命的なほどにバランスを欠いていた。それ以来、日本はその防衛線に固執するだけで、アメリカ海軍が日本帝国の中心に向かって進むにつれて、防衛線でアメリカ海軍が疲弊することを期待した。

1942年11月のガダルカナル戦は連合国の最初の攻勢であった。しかし、それはアメリカの船舶および上陸用舟艇の大半を必要としたアメリカの北アフリカ上陸の影で戦われた。

ガダルカナルで、ニミッツの蛙飛び戦略が具体化した。日本は降伏や撤退を望まないため、ニミッツは東京および日本帝国の中心部への本当の道は海だけにあり、防衛線を経てはいないことを理解した。

地図を研究した結果、ニミッツは日本がビルマからアリューシャン列島に至る1万4200マイルの海岸線を防衛するのは容易でないことを理解した。アメリカ海軍が回復するのに対し、日本は海の局地的な場所さえ享有できなかった。数百の島々に散開する日本の守備隊、それらの基地、飛行場、砦、港、およびトラック島のような一見、難攻不落であるような要塞でさえ、最終的に問題ではなかった。

アメリカはそれらのほとんどを素通りしただけで、置き去りにされて孤立した日本の部隊は全て、アメリカ軍が日本に到達した時、戦わずしてアメリカの手に落ちるという仮定で前進した。戦争中、アメリカ陸海軍は日本の部隊が集結していたトラック島、ヤップ島、ラバウル、ニューギニアのウェワク、ジャワおよび台湾などを迂回した。

しかし、そうするために、ニミッツには広大な太平洋を横断するための制海権と飛び石として2、3ヶ所の前進基地が必要であった。

1943年の秋までに、アメリカはエセックス級の新造空母10隻を太平洋に就役させて、蛙飛び作戦が本格的に始まった。1943年11月、海軍はギルバート諸島のメイキンとタラワを占領した。マッカーサー将軍は独自の蛙飛び作戦でニューギニア西部に日本軍の大規模な守備隊を後にして、フィリピンへの進撃を開始した。日本人はただ傍観することしかできなかった。空母の威力を再構築しようとしたが、彼らは戦略的に動けないことに気づき、自らの拠点の虜囚となった。

しかし、ニミッツは中部太平洋での進撃を、日本の商船隊に対する潜水艦攻撃と連動させたため、日本は拠点さえ支えられなくなっていった。ニミッツは真珠湾から発進する潜水艦を使って、日本近海だけでなく、東西の資源地帯の日本にとって死活的に重要な補給線を攻撃し始めた。連合国はニューギニア、マラッカ海峡、オランダ領東インド諸島、インドシナおよびビルマ沿岸で潜水艦戦を繰り広げた。第二次世界大戦の戦闘で合計800万トンの日本の船舶が失われたが、そのうち480万トンは連合国の潜水艦によるものであった。

日本には潜水艦戦に対する備えが全くなく、潜水艦は戦闘地域の水上部隊と協同した場合のみ有効であるという時代遅れの教義に依然として固執していた。

1944年初めまでに、日本の損失は生産を遥かに上回っていた。それにもかかわらず、日本はその困難な状況にある帝国の膨大な資源——イギリス領マラヤとオランダ領東イ

ンド諸島の石油、タイの米、ベトナムのゴム、中国の石炭およびボーキサイト——を集めることができなかった。そうした必需品の移動はほとんど不可能であり、日本の占領地域で産出された 1900 万トンの石油のうち、それまでに日本に届いたのはわずかその 25 パーセントであった。いくらかの救いは、需要を減らすという日本帝国の堅実な緊縮であったが、それは同時に日本の国力をも減じていった。1944 年までに、日本は台湾の砂糖および満州の穀物から船と飛行機の燃料を調合しようとするまでに衰退し、船舶輸送はアメリカの潜水艦戦および陸上基地から発進する哨戒機との戦いに直面して、完全に崩壊していた。

戦争中、日本が中国に展開していた陸軍の実働師団の 5 分の 4 に相当する 200 万の部隊については、連合国が制空海権を掌握しているため、どこにも移動させることが出来なかったのも、どれだけ多くの師団が中国にしようと問題ではなかった。

1944 年初めまでには、太平洋におけるアメリカ空母の優位は圧倒的となり、戦艦は効果的な新しい役割である空母を援護するための対空砲火に一段と適合していた。しかし、依然としてアメリカの勝利は確実ではなかった。日本の防御の粘り強さはいたるところで作戦を長引かせ、部隊を疲弊させた。ニミッツとマッカーサーが進撃するにつれて、アメリカの後方連絡線は自ずと延びた。

それによって今度は、燃料、弾薬、飛行機、交換部品、食糧、建設資材、ブルドーザー、トラック、ジープ、戦車、上陸用舟艇、浮きドックの補給と整備の需要を天文学的に増大させた。アメリカは同時にオーバーロード作戦およびドイツへの進攻作戦にも補給を実施しており、全てのものが莫大に必要であった。アメリカ海軍建設工兵隊（シービー）の任務は他の何にも劣らず、この大洋戦での勝利に貢献した。軍事情報同様、兵站は戦争中、アメリカによって十分に高く評価された重要な領域であったが、日本は一貫して過小評価していた。ワシントンで、キング提督は「配給の問題」が戦争努力を常に狂わせる恐れがあると絶えず警告していた。「配給の問題が最重要になり、規模ではなく動作が重要な要素になった。配給は今や生産より重要であった。西海岸の港だけでは配給能力が足りなかったのも、メキシコ湾と東海岸の港を兵站計画に含む必要があった。」

レイモンド・スプルーアンス提督はマーシャル群島を攻撃する艦隊を指揮し、クェゼリンは 1944 年 2 月に占領された。

クェゼリン島は戦略的な大収穫で、そこには必要であった最大の滑走路を造るのに適した潟とスペースがあった。すでにアメリカ海軍は多くの空母を持っていたので、マーシャル群島攻撃と、トラック島およびカロリン群島に対する 12 隻の空母による陽動作戦を連動して実施することができた。（トラック島でのアメリカ海軍の唯一の「陽動攻撃」は、日本の減少しつつあった輸送船および油槽船の 10 パーセントを一撃でなくものに

し、日本帝国と資源供給地や要塞との間の交易や連絡をほとんど不能にした。）

すでに、アメリカの戦術は効率化されていた。海兵隊員はより効果的に上陸し、空や海からの遭難救助の技術は高まり、アメリカは撃墜されたパイロットを救助し、日本は彼らを失った。レーダー制御の対空砲火は改良に改良を重ねられた。

それでも、ニミッツは最大時 5 個の海兵師団、数個の陸軍師団、および艦載機で運ばれる航空機積載量の大部分を駆使して、少量で大事をなしていた。彼は今日の陸上部隊と比較すると極めて少数の兵士しか保有していなかった。(マッカーサーは自身の割り当て分として、12 個師団以上持つことは一度もなかった。)

1944 年 6 月、ニミッツはマリアナ群島を攻撃した。距離は思わず息を飲むほどであった。サイパン島はマーシャル群島の最も近い作戦基地、エニウェトクから 1000 マイル、真珠湾から 3400 マイルに位置する。しかも、サイパンは東京からわずか 1350 マイルであったため、日本の方が防御しやすい距離であった。

戦争が最高潮に達するにつれて、米軍は、マヌス島、レイテ島、グアム島および沖縄に、浮きドック、貯蔵所、燃料、弾薬、および修理設備のある基地を築いた。その後方で船舶輸送が絶え間なく続いた。仮に輸送が停止すれば、戦争も停止したであろう。その「輜重艦隊」は重要な革新であった。油槽船、工作艦、弾薬輸送船、給糧艦、および予備の飛行機を搭載する護衛空母は、指定された基地に到着し、艦隊が必要とする物資を全て積み込んだ高速船を護衛のもと作戦地域に向かわせた。

太平洋戦争は空母によって勝利した。空母なしでは、アメリカは 1945 年になってもハワイかソロモン諸島から動けなかったであろう。輜重艦隊や襲撃を行う潜水艦だけでなく、対空および対潜水艦の護衛艦に援護された空母なしには、航空機だけでは太平洋の途方もない距離に対処できたはずはないからである。

空母は最終的に、戦術的、戦略的なエア・パワーを航続圏内に運んだ。空母は増大しつつあるアメリカの軍事力に直面した日本にとって唯一の救済手段であった地理を克服した。テニアン島、沖縄および中国の陸上基地から発進する哨戒機が、日本の最後の補給路を遮断した。

1945 年 4 月から 8 月までの 5 ヶ月間に、カーティス・ルメイ将軍の第 21 爆撃集団が、超空の要塞 B-29 で日本の主要都市を粉砕した。日本の防空態勢は物資欠乏のため極めて弱体化していたので、爆撃機は高度 7000 フィートで侵入して搭載する爆弾を投下した。日本の 66 の都市の市街地の 40 パーセントが破壊され、800 万人が家を失った。日本の労働者の常習的欠勤率は 50 パーセントに昇った。アルミニウム生産量は戦時中のピークの 9 パーセント、鉄鋼生産量は 15 パーセントに低下した。

それから、もちろん、原子爆弾があった。オークリッジ、ハンフォードおよびロス・アラモスの「秘密都市」、および 13 万人を雇用し、今日の約 244 億ドルに相当する 20

億ドルを賭けた「マンハッタン計画」で、原子爆弾を発明するための資源を、アメリカだけが割くことができた。政府の十分な支援、最先端の科学者を揃えたチームをもってしても、そして、爆撃やサボタージュによる中断がなかったにもかかわらず、核爆弾は1945年7月まで準備できなかったため、使用することを意図していたドイツとの戦争には間に合わなかったという事実、その計画の極端な困難を垣間見る。一発の原子爆弾が8月6日に広島に投下され、同市の50パーセントを破壊し、6万6000人を殺戮した。8月9日には長崎にも投下され、建物の23パーセントを破壊し、4万人を殺戮した。

リチャード・オーヴァリーが著書『なぜ連合国は勝利したか』(Why the Allies Won)で述べているように、エア・パワーのおかげで、太平洋では「連合国は主導権を回復した。」中国大陆での抵抗が1944年に衰え、沖縄で8万人のアメリカ兵が死傷したことから判断して、日本は1945年に九州、1946年には本州へ侵攻するであろうアメリカに大規模な損害を加えることになるであろう。それゆえ、通常爆弾お核兵器による戦略爆撃が、「とどめの一撃を加える」ために必要であった。

太平洋での戦争は、戦略的な「間接アプローチ」の究極的表現であった。アメリカは主に日本の補給と後方連絡線を攻撃目標とし、日本の一体化（大したものではなかったが）、海の前線および対外交渉を着実に浸食した。そうは言っても、我々は戦略的な間接性と戦術的な直接性の混合にも注目しなければならない。東京の隠れた標的をアメリカは間接的に重視すると同時に、主要な中間地点の群島を激しく攻撃した。アメリカは太平洋で死亡したアメリカ兵1人に対して12人の日本兵を殺戮した。全体で68万5000人の日本兵が41万4000人の船員および5万人のパイロットとともに、アメリカとの戦いで死亡した。日本はアメリカの弱点、退廃および臆病なところまで推定して、それに基づいて真珠湾攻撃や戦争における全体的な戦略を立てていたもので、流血の惨事は日本人の士気を挫くのに有効であった。

戦争中、アメリカが「生産の奇跡」を享受したのに対して、日本は物不足に苦しんだ。日本のGDPは1941年から45年まで停滞していた。空と海からの攻撃および日本の輸送船の着実な駆逐によって、あらゆる生産に不可欠な石炭が十分な量を輸送し得なかっただけではない。原子爆弾が投下される遥か以前に、損失は死傷者300万人、輸送船の80パーセント、工業用機械の35パーセント、建物の25パーセント、および、国富の25パーセント——1945年の貨幣価値で2940億円——に昇っており、日本の戦時経済は崩壊していたのである。

アメリカのエア・パワーがこの損害のほとんどをもたらしたのであるが、それを航続圏内まで運んだのは海軍であった。

アメリカのシー・パワーは、接近方法と奇襲の要素だけでなく、行動の自由と目標の選択を符合させた。太平洋戦争において、アメリカはその戦いで他のどの国家にも不可

能であつたであろうことを成し遂げた。アメリカは戦術的なエア・パワーを手にして、日本本土上でそれを動かした。アメリカの陸軍と海兵隊はあまりに多くの機械化車両を保有し、機動力を重視しすぎて、かえって独力で動けなくなってしまった。アメリカは他のいかなる大国をも超越する船舶輸送力で、それらを移動させた。つまり、これがアメリカ流の戦争方法である。